様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１１１０

研究課題名（和文）土製耳飾りの集成と分析による縄文時代の社会組織と儀礼へのアプローチ

研究課題名（英文）An approach to social organization and rituals in the Jomon period through collection and analysis of earthen earrings

研究代表者
設楽　博己（Shitara, Hiromi）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：７０２０６０９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：中部高地地方と関東地方北部における縄文時代後期後葉～晩期の土製耳飾りの研究をおこなった。それぞれの地域を代表する土製耳飾り出土遺跡を選び、可能な限り実見と写真撮影をおこない、基礎的なデータ収集に努めた。収集したデータを類型化して分類し、それぞれの類型の年代的な検討をAMS14C年代データと突き合わせながらおこなった。当該地域の当該遺跡の発掘調査報告書掲載の土製耳飾りのデータを収集した。これらの基礎的なデータを型式学的に分析することにより、土製耳飾りの性格についても多少の考察を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
縄文時代の装身具のなかでも飛び抜けて数が多く、形態や文様のバリエーションが豊富な土製耳飾りを分析することによって、儀礼的な意味や、集団における個人の帰属の目印、あるいは集団自体の表象的機能上述の社会的な機能に迫ることが期待できる。本研究はこの視点から中部高地地方と北関東地方の縄文後・晩期の代表的な遺跡における土製耳飾りのデータを収集した。それにもとづき土製耳飾りの集団表象としての役割のモデルを構築し、土製耳飾りの大きさの変異、様式構造の遺跡間・地域間の差異などにさまざまな角度から検討を加え、縄文時代の社会組織と儀礼行為の解明の基礎的研究とした。

研究成果の概要（英文）：A study was conducted on earthen ear ornaments from the late Jomon period to the final Jomon period in the Chubu highland region and the northern part of the Kanto region. I selected earthen earring excavated sites that represent each region, and tried to collect basic data by observing and photographing them as much as possible. The collected data were categorized and classified, and chronological examination of each type was performed while comparing with the AMS14C chronological data. I collected the data of the earthenware earrings published in the excavation report of the relevant site in the relevant area. By analyzing these basic data from a morphological point of view, I have added some considerations to the characteristics of earthen earrings.

研究分野：考古学

キーワード：土製耳飾り　縄文時代後・晩期　様式構造　儀礼　社会組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

縄文時代の装身具はたんに身を飾るだけではなく、儀礼的な意味や、集団における個人の帰属の目印、あるいは集団自体の表象的機能を果たしていたと考えられている。縄文時代の装身具の中でも飛び抜けて数が多く、形態や文様のバリエーションが豊富な土製耳飾りを分析することによって、上述の社会的な機能に迫ることが期待できる。本研究はこの視点から東日本の縄文後・晩期の土製耳飾りを悉皆的に集成する。それに基づき土製耳飾りの集団表象としての役割のモデルを構築し、土製耳飾りの大きさの変異、様式構造の遺跡間・地域間の差異などにさまざまな角度から検討を加えることによって、縄文時代の社会組織と儀礼行為の解明の基礎的研究とする。

２．研究の目的

縄文時代後・晩期に土製耳飾りが大量につくられる。土製耳飾りの約束事は社会的なものであり、そもそも耳飾りは人目に触れる耳に装着するものであるから、一種の表示物である。それがいかなる意味をもった表示であったのか、社会的な意味を探っていく必要がある。この問題を解決するにはどのようにすればよいのか。社会的な表示とは、たとえば部族や氏族といった集団表象であったり、ステイタス・シンボルであったり、年齢に応じた地位や立場によると考えられる。一つの集落の中に一定の約束事にもとづく多種多様な耳飾りが存在し、一定の地域的な範囲において一定の様式を形成し、その中によその地域の耳飾りが入り込む現象、それを分析することにより社会組織に応じた集団規範や集団儀礼のあり方を推測することができるのではないだろうか。これが、本研究を企画した意図であり、目的である。

３．研究の方法

土製耳飾り出土遺跡の調査報告書から、耳飾りのデータを収集する。対象は、北海道から愛知県域にわたる東日本の縄文後・晩期の資料である。データ項目は、耳飾り自体の遺物データと遺跡における出土状況など遺跡データの二つに大別される。遺物データは、基本的には出版されている報告書に基づいて蓄積していくが、代表的な遺跡は実際に現地にて観察・記載していく。遺跡データについては学生の補助業務に頼って入力する。入力に際しては、土製耳飾りの①型式、②年代があらかじめ設定されていなくてはならないし、それが分析の基礎になる。①の型式分類はすでにおこなっている断面形態にもとづく分類〔設楽博己 1983「土製耳飾」『縄文文化の研究 9』雄山閣〕を吟味したうえで、文様を加味した型式を設定する。悉皆的なデータベースにもとづいておこなうので、厳密かつ包括的な型式設定が可能になろう。今回の研究は、同一時期における土製耳飾りの様態が基礎になるので、②にもとづいた編年作業は特に重要である。層位的資料や遺構一括資料を編年の基準にするが、関東・中部高地地方の遺跡にはそのような資料が少ないので型式学的な検討をおこなう。該期の土製耳飾りの型式学的検討によるいまだかつてないスタンダードな編年構築を目指す。

以上収集された資料と基礎的な検討を踏まえて、次の項目に分析を加える。①各遺跡における土製耳飾りの特徴の分析、②各地域における土製耳飾りの様式の設定と比較、③様式における異系統耳飾りの摘出、④直径を主とした土製耳飾りの大きさの分析、⑤出土状態による土製耳飾りの使用および廃棄の分析。たとえば群馬県桐生市千網谷戸遺跡と千葉市加曾利南貝塚の土製耳飾りは、ほぼ同じ時期の関東地方における耳飾りだが、大きな違いがある。また、千網谷戸遺跡の耳飾りには粗雑な作りのものからきわめて優秀な製品まで偏差が著しい。小さいものから大きなものまであるが、優秀な作りの同じ型式のものに大小がある。千網谷戸遺跡の耳飾りのなかで列点をもつものは、山梨県域に分布の中心のある型式である。こうした差異や異系統品の存在が何に根差しているのか考える手掛かりとして、ほかの装身具や身体変更の一種である抜歯の分析による推定なども参照しながら、社会組織における集団表象の役割を演じていたと仮定したモデル構築をおこなう。

４．研究成果

（1）1 年目は群馬県域と埼玉県域の土製耳飾りの分析をおこなった。群馬県域ではみなかみ町矢瀬遺跡の土製耳飾りおよそ 200 点を写真撮影して分類するとともに、すでに実測図を作成してある前橋市西新井遺跡の土製耳飾りを再検討した。埼玉県域では、補助業務により県内で耳飾りが多量に出土している遺跡をすべてピックアップして、報告書に基づいて図面をコピーし、さらにその基本属性のデータベースを作成した。いずれも後・晩期土製耳飾りの中心をなす地域に該当する。2 年目は群馬県域と栃木県域のデータ収集をおこなった。報告書にもとづいて図面をコピーし、さらにそ の基本属性のデータベースを作成した。 土製耳飾りは一つの遺跡で様々な大きさと形態と文様が展開した。それが年代的にどのように細別できるのか、一つの段階でもバリエーションが豊富だが、分類して年代をおさえ、アセンブレッジの研究をおこなって地域間比較を進めることができた。3 年目は新潟県域と山梨県域の①新潟県上越市籠峰遺跡、②新潟県十日町市樽沢開田遺跡、③山梨県北斗市金生遺跡、④山梨県北杜市石堂 B 遺跡を中心に資料収集と分析をおこなった。いずれも 100 個以上と多量の耳飾りを出土する遺跡であり、上越、甲斐地方という 土製耳飾り主要分布圏の北西半の遺跡を対象にして、その特性をさぐった。調査方法としては、形態的・文様的な視点からの分類に即して 1 点ずつ分類し、記載した。また、全点写真撮影を行うことを目指した。分類は主に断面の形態によるものであり、それを主軸に点数を数えて、文様を加味して分類して、どのような傾向があるか考察の基礎データとした。撮影した写真は、すべてパソコンに入力して、整理保管した。時期はおそらく縄文時代後期後半 であるが、体系的な編年を組んでいくことによって、検証していきたい。4 年目は、群馬県域と長野県域を中心に資料収集と分析をおこなった。群馬県では東吾妻町唐堀遺跡から出土した土製耳飾りおよそ 500 点を実見し、すべて写真撮影をおこなうと同時に観察を行い、その特徴の把握につとめた。また、群馬県榛東村茅野遺跡の耳飾りを実見して唐堀遺跡と比較した。長野県は長野市宮崎遺跡の資料を調査した。

（2）分析の成果は、上越地方に特徴的な耳飾りが抽出できたことである。それは断面の上

端と下端が幅広く仕上げられて、上端面に沈線と 区画列点を施すものである。それは甲斐地方にまで広がりをみせるが、上野地方にはあまり進出していないことも確認できた。唐堀遺跡からはトチノキの実を中心にした水さらし場遺構が出土しており、そこ から彫刻を施したトーテムポール状の木柱が出土している。その彫刻の文様がブリッジをもった環状の土製耳飾りの彫刻文様とまったく同じであることを確認した。水さらし場遺構のトチノキの実の AMS 炭素 14 年代はおよそ cal3300BP であるので縄文時代後期終末であり、この土製耳飾りの文様類型の年代を確定することができた。木柱というシンボリックなものとの共通性は、耳飾りの性格を考えるうえで重要である。宮崎遺跡の土製耳飾りは大宮台地に特徴的な透かし彫りのある耳飾りが出土しているが、宮崎遺跡出土のこの類型の耳飾りには大宮台地から持ち込まれたと思われる資料と在地で製作されたと思われる資料が併存していて、それぞれの特徴について把握することができた。

（3）耳飾りの社会的な位置づけを考えてゆく手がかりとして、イアン・ホッダーが著した『シンボルズ・イン・アクション』のうちアフリカの部族社会における二つの部族で異なる耳飾りを用いているということの書かれた章を翻訳した。それら耳飾りが婚姻などを通じてどのように展開していくのかをもとに、縄文社会の 耳飾りの社会的意義を推測する手掛かりの一つに加えることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 設楽博己	４．巻 なし
２．論文標題 千葉県安房神社洞窟遺跡の土器と抜歯の年代と系譜	５．発行年 2020年
３．雑誌名 世界と日本の考古学－オリーブの林と赤い大地－	６．最初と最後の頁 303　315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 設楽博己・近藤修・米田穣・平林大樹	４．巻 100
２．論文標題 長野県生仁遺跡出土抜歯人骨の年代をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 物質文化	６．最初と最後の頁 95　104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 設楽博己	４．巻 なし
２．論文標題 土偶あれこれ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 群馬県立歴史博物館第100回企画展　ハート形土偶大集合!!－縄文のかたち・美、そして岡本太郎－	６．最初と最後の頁 106-110頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 設楽博己	４．巻 29
２．論文標題 土偶よもやま話第1回黥面土偶と有髯土偶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 MY舎人倶楽部	６．最初と最後の頁 4-5頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 設楽博己	４．巻 30
２．論文標題 土偶よもやま話第2回縄文人の入墨の検証	５．発行年 2020年
３．雑誌名 MY舎人倶楽部	６．最初と最後の頁 4-5頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 設楽博己
２．発表標題 縄文土偶の顔
３．学会等名 朝日カルチャーセンター横浜
４．発表年 2021年

１．発表者名 設楽博己
２．発表標題 世界の土偶、日本の土偶
３．学会等名 朝日カルチャー横浜
４．発表年 2020年

１．発表者名 設楽博己
２．発表標題 土偶から復元する縄文人のいでたち
３．学会等名 朝日カルチャー横浜
４．発表年 2020年

１．発表者名 設楽博己
２．発表標題 土偶とはなにか
３．学会等名 群馬県立歴史博物館第100回企画展連続講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 設楽博己	４．発行年 2022年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 296
３．書名 縄文vs.弥生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関